

## 5 2

精神分裂病の病状と社会復帰に関わる能力障害との関連について

— 精神医学的能力障害評価面接基準 (DAS) の信頼性検定 —

(精神医学教室)

丸田敏雅、本郷誠司、清水宗夫、加藤正明、

精神障害評価面接基準 (DAS: Disability Assessment Schedule) は、精神障害者の機能障害、および能力障害の評価のために WHO が開発した半構造化面接である。

今回演者らは、DSM-III-R により精神分裂病と診断された 29 例、分裂病様障害と診断された 3 例を対象として、同席面接法による DAS 日本語版の信頼性検定を施行した。DAS は 1. 全般的行動、2. 社会的な役割、3. 入院中の患者、4. 修正因子、5. 包括的評価の 5 区分から構成されている。第 1 区分は 4 項目から構成され、 $\kappa$  統計量はいずれも 0.6 以上であった。第 2 区分は 14 項目から構成され完全一致の 3 項目を含み、0.6 以下の項目は 1 項目のみとなり高い一致率が得られた。第 3 区分は入院患者に適用され、病棟内の行動、看護婦の意見、患者の仕事、外界との接触の 4 つの下位区分があり、前 2 つは看護職員からの情報をもとに評価する規定があり、これら 21 項目の  $\kappa$  統計量は 0.6 未満が 10 項目と他の区分に比し一致率が低く、残りの 2 下位区分 8 項目では 0.6 未満が 2 項目認められた。第 4 区分も特別な資質、特別に不利な点、家庭環境、外部での支持の 4 つの下位区分、17 項目から構成され、0.6 未満は 2 項目のみという良好な一致率であった。第 5 区分は包括的評価の 1 項目からなり、その  $\kappa$  統計量は 0.754 という良好な結果であった。

上記のように、一致率はほぼ満足のいく結果が得られ、今回の研究により DAS 日本語版の信頼性は、初回の信頼性検討とすれば、一応の成果が得られたものと考えられる。

謝辞：本研究は平成 4 年度東京医科大学研究助成金の援助を得て施行をできたことを感謝いたします。

## 53 外傷による顎関節症状の臨床統計的観察

(霞ヶ浦・口腔外科) ○杉澤明弘, 山田容三  
高森基史, 本田一文, 井上 雄  
(口腔外科学) 工藤泰一, 千葉博茂  
成田令博, 内田安信

顎口腔領域の外傷は、その治療に顎運動や咬合機能回復等、予後に対する配慮が重要である。当科を受診した外傷性疾患のうち顎関節症状を呈した症例について臨床統計的観察を行い報告した。

【対象】過去 3 年間に霞ヶ浦病院歯科口腔外科を受診した顎口腔領域の外傷患者 587 例中、外傷性顎関節炎 32 例 (5.5%) 及び下顎骨骨折後、顎関節症状を後遺した 13 例 (2.2%) について検討した。

【結果】(1) 外傷性顎関節炎症例では、①男女比は 1.5:1 と男性に多く、②原因別では男女共に交通事故によるものが多かった。③受傷部位は男性では下顎体部・角部、オトガイ部 12 例 (63.2%)、女性では頬部 6 例 (46.2%) が多かった。④症状としては、男性では顎関節部の疼痛 11 例 (45.8%)、雑音 11 例 (45.8%)、女性では開口障害 8 例 (47.1%) が多く、⑤治療法としては投薬、スプリント療法 22 例 (61.1%)、開口訓練 6 例 (16.7%)、咬合調整 4 例 (11.1%) が主体であった。⑥予後は比較的良好であったが、受傷後症状発現から受診までの期間が長いものでは不良例がみられた。

(2) 下顎骨骨折後、顎関節症状を後遺した症例は、全下顎骨骨折 94 例中、13 例 (13.8%) であった。①男女比は 1:2.3 と女性に多く、②原因別では男女共に交通事故が多かった。③受傷部位としては 13 例の全骨折線中、関節突起部の骨折 8 例 (50%) が最も多かった。④ 13 例中 8 例 (61.5%) が非観血的治療を施されていた。⑤症状としては顎関節部雑音が 12 例 (クリック 8 例、クレピタス 4 例、93.3%) を占めていた。⑥治療は投薬、スプリント療法が主体であった。⑦予後は必ずしも満足できる結果ではなかった。

【考察】今回の検討では、長期に及ぶ症状不変例や、治療に咬合調整を要した例等、本来個人が有していた顎関節機能異常が外傷を契機に発現した可能性も示唆された。受傷後、早期の欠損補綴等、咬合機能改善及び長期にわたる観察が必要であると思われた。